

「すでに救いを見た」

今日の聖書箇所は、ルカによる福音書におけるクリスマス物語の直後にあたります。まだまだクリスマスの喜び、つまり、御子イエス・キリストがお生まれになったことの喜び。その余韻が十分に残っている箇所になります。ここで、まず重要なのは、イエス様の両親であるマリアさんとヨセフさんは、ユダヤ教の伝統に忠実な信仰者であったということです。それは、要するに律法に従順であり、キリスト教的視点から見れば古風であったと表現できるかも知れません。ユダヤ教における旧態依然とした支配階級であった、律法学者やファリサイ派や長老たちと何度も対立することになるイエス様は、だからと言って、ことさら革新的な家庭で育ったわけではなかったということです。マリアさんとヨセフさんは、「モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、その子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。それは主の律法に、初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される、と書いてあるからである」。イエス様のご両親は、律法に書いてある通りに行動されたのです。のちにイエス様御自身も、「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである」と、これはマタイによる福音書の報告ですが、そう語られました。

今を生きる私たちが、旧約聖書に書いてある律法について、特別に意識するところがあるとなれば、多分、「十戒」くらいかと思います。レビ記や申命記に書かれた、多くの律法の縛りを私たちは意識することはありません。私たちはユダヤ教徒ではなく、キリスト教徒なので、別にすべての律法を守る必要はありません。けれど、もちろん、私たちにも聖書から教えられているお約束事、伝統的規範があります。その一つが、先週の水曜日から始まった主の御受難を憶えて過ごすという

営みです。イエス様のご両親であるマリアさんと、ヨセフさんが古い仕来りに則って献げ物をしたように、私たちも福音書に遡るイエス様の御受難の出来事に心を向けて、今の生活を整えていくのです。私たちにも、守るべき伝統であり約束があるということですね。それは、堅苦しい息苦しいというものではなく、むしろ、「そのようにして神様とイエス様に繋がっているのだ」という心の平安を得られるものです。私たちにとって、何にも縛られない自由というのは、非常に有り難いことですが、しかし、逆に言えば何の拠り所もないというのは不安なものです。私たちは、主の十字架に囚われて、この受難節を過ごすことで、「イエス様は私たちのために命を尽くされたのだ」という拠り所を得ていくのです。それは言い換えるなら、逃げ場所を得ていく、ということでもあります。私たちは孤独に生きていくのでも、独りで困難に立ち向かうのでもない。私たちよりも先に、イエス様が、私たちのために大きな困難を背負われた、そして、私たちのために死なれた。そのことを受け止めて、ちょっとだけ安心するのです。こんな私のために命を投げ打ってくださった方がいると知って、慰められるのです。それが、この受難節に古来の伝統に従いつつ、心に留めたいキリスト教の福音であります。

また、聖書に遡る伝統に従うという事は、同時に、聖霊の導きに従うという事でもあります。古い律法という伝統に従ったイエス様の家族は、聖霊に導かれてやってきたシメオンと言う、おそらくは歳をとった老人と出会います。聖書には、神様の定めた条件が満たされるまで、決して死なない、とされる人物が幾人か登場したり、あるいは言及されたりしています。例えば、マタイ・マルコによる福音書において、イエス様が語られた御言葉には、「はっきり言っておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる」という言及があります。それが真実であるかどうかには、もちろん、信仰の有無が関わってきますが、でも、翻って考えてみますと、そもそも誰の死に際にも、神様の与えられた条件が満たされたとい

う瞬間があるのかも知れません。あらかじめ知らされていないから、なんとも判断のしようはありませんが、私たちにも然るべき役割と、定められた時があって、その瞬間に向けて御言葉と聖霊によって導かれているのかも知れません。

シメオンは、前もって知られていた瞬間に、いよいよ立ち会うことになります。救い主、メシア、キリストが神様によるめぐり合わせのままに、両親に抱かれて現れたのです。28節～33節までの御言葉は、とても美しいと思います。シメオンは、自らに課せられた役割が無事果たされたことと、祈り求め続けてきた自身の願いが成就したことを、一度に理解して、救い主をその腕に抱いたのです。そして、おそらくとても満たされた思いで、賛美の言葉を語りました。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです」。この短い賛美の中には、ちゃんと異邦人への救いについても触れられています。エルサレム神殿に詣でるというユダヤ教の古い伝統的仕来りの中で、異邦人を照らす光も輝くんだということです。イエス様がお生まれになった時に、遙か東の国から異邦の博士たちがやってきたことの意味が、ここで再確認できます。イエス様は、イスラエルの民のためにだけお生まれになったのではなく「万民のために」お生まれになったのだ、と。最初のクリスマスに博士たちが招かれたのは、この「万民のために」ということの顕れだったということです。

このようにクリスマスの出来事から続く、今回の聖書箇所は、全体としてイエス様とシメオンとの感動的な巡り合わせと、シメオンによる豊かな賛美、そして祝福という幸せな雰囲気でも満たされています。しかし、最後の部分だけ、強烈に暗い影を落としています。イエス様は救い主である、ということに変わりはありませんが、「反対を受けるしるし」がすでに定められており、また、母マリア自身にとっても「心を剣で刺し貫かれる」ことが定められていると言います。御子イエス様

の誕生を祝い、感謝するために神殿にやってきて、そして、聖霊に満たされたシメオンによって賛美と祝福をもらい、幸せな雰囲気がいっぱいだったところに、すでに御受難へ向けた鋭い一言が添えられている。シメオンさんは、余計なことを言うんだな、とも正直思います。私たちの身近なところに重ねて考えてみますと、生後1ヵ月くらい経って、人前に赤ちゃんを連れて行けるようになり、有り難いことに、多くの人たちから「可愛いね」とか「顔がそっくりだね」とか「ほっぺがまん丸だね」とか温かい言葉を受け取る中で、突然「この子は、いつか多くの人の敵意を買って、あなた自身も剣で心を刺し貫かれるような悲しみに遭います」なんて言われたら、まあ、普通、嫌だし怖いですよ。この場面における、マリアさんとヨセフさんの心境については想像するしかありませんが、この夫婦は、すでにこの時から、大きな苦難を背負わされていた、と考えられます。クリスマスの出来事の直後から、受難の兆しは示されていたということです。

だから、私たちが福音書のどこを読んでも、イエス様が素晴らしい御言葉を語り、奇跡を起こしているところを学び、分かち合うとしても、その福音の片隅には常に「十字架による死」という暗い兆しが添えられているのです。イエス様の十字架を思う、と言うのは、そういうことです。「ハレルヤ!」「ホサナ!」「シャローム!」と明るい調子で主を賛美することが心地良く感じる一方で、その賛美の裏側には、いつも必ず十字架がある、ということ。イエス様の死がある、ということ。とても残酷な言い方をするなら、クリスマスを祝う喜びの最中ですら、そこにはすでに十字架の影があるということです。博士の一人が捧げたと言われる没薬は、ご遺体の防腐処理に用いられる薬です。その没薬が暗示し、象徴するのは、いずれ来る御受難の時です。

ただ、その初めから逃れられない十字架、イエス様の死というものは、言うまでもなく「私たちの救いのため」でありました。私たちが、人生において、どれだけ辛い目にあっても、どれだけ絶望しても、どれだけ追い詰められても、でも、イエス様がすでに十字架によって道を開いてくださ

っている、赦しと慰めを与えてくださっている。だから、もうちょっと踏ん張ってみようか、祈ってみようか、期待してみようか、と思えること。「わたしは、この目であなたの救いを見たからです」。このシメオンの言葉は、私たちがいつも前向きに生きていくために必要な言葉でもあります。

もう私たちはすでに救いを見たんだ、と。社会状況の変化、感染症の流行、自分の能力の限界、病やケガ、老いたることの実感、人間関係の難しさ。真剣に生きていればこそ、突き付けられる様々な困難や試練や失敗はありますが、私たちがそれらに立ち向かおうとする、遥か以前から、すでに救いは備えられている、ということ。「主の十字架を仰ぎ見る」ということは、そういう救いの確信を忘れないということです。

これから、私たちは40日間ほど、イエス様の御受難を心に留めて、日常生活の中に、一抹の悲しみを添える日々を過ごして参ります。それが伝統的なキリスト教の過ごし方になります。しかし、この伝統的営みは、その死によって私たちの救いと幸せを約束してくださったイエス様のことを心に留める営みです。つらいけれど、恵みを覚える営みです。また、そのつらさ、悲しみ、暗い日々はいつまでも続くものではありません。来たるイースターの日、私たちは十字架で死なれたイエス様のご復活をお祝いすることになります。すべてを背負って死なれたイエス様は、再び、私たちの隣人となるために、戻って来てくださいます。その喜びの日のことを心待ちにしながら、しばらくの間、主の十字架を憶える日々を過ごして参りましょう。

お祈りを致します。

神様。今日も私たちのことを御心に留めてくださり、このように賛美と祝福の礼拝へと招いてくださり、ありがとうございます。あなたは愛してやまない大切な御子イエス・キリストを、私たちの救いのために、この地にお与えになり、そして、私たちの罪を贖うために、完全なる犠牲として献げられました。その測ることのできない、あなたの愛と、イエス様の慈しみを憶えて、感謝と賛美の祈りをお献げ致します。どうか、私たちがこの受難節の日々、謙遜に主の十字架を受け止め、信仰をもって主の死を受け止めることができますように。あなたが支え導いてください。そして、来るイースターを心から喜び、主の御復活をお祝いすることができますように。お守りください。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。